

「供給が需要を生む」の史的探究

—欧米経済学から日本図書館界へ—

Historical Research of “Supply Creates Demand”

斎藤 仁史

Masashi SAITOH

1. はじめに

本稿は、日本の図書館界でいわれている「供給が需要を生む」という言葉の歴史的整理である。国語辞典的には、供給とは「要求や必要に応じて物をあてがうこと」であり、需要とは「もとめ」である¹。この説明からもわかるように、一般的には、求めすなわち需要が先にあり、それに応じて供給すると考えられている。しかし、この言葉では順番が反対である。そして、需要と供給の対象、つまり何が求められ何を供給するのか、この短い言葉だけではわからない。そこで、本研究ではこの言葉が、誰がどのような場面で使い、そしていかなる変化が生じたのかを調べることにした。その過程で、この言葉の意味するところが理解されるであろう。

したがって、研究の目的は「供給が需要を生む」という言葉が、誰によってどのように使われたかを探ることである。言葉が使われた歴史的事実を解明し、整理することが目的である。だが、この言葉の意味する法則性の真偽を検証するためではない。ただ、近い将来はこの法則に沿って実施された図書館運営の功罪などを検証することを狙いとしている。すなわち本研究は、次の研究のための基礎研究という位置づけである。

言葉の歴史を探る本研究の方法は、文献調査である。本来、言葉の歴史という視点では話し言葉も重要である。ただ、話し言葉の多くは残すことができない。そこで、残された文献に頼ることになった。「供給が需要を生む」およびこれに類する言葉が書かれている文献を、探すことにより事実に向き合っている。

言葉を調査すると、経済学の分野に足を踏み入れることになった。その意味では、学際的研究である。ただ、経済学の分野では定説の集合体である辞書を多用していて、経済学的な発見を論じたわけではない。だが、経済学の常識を知ることにより、図書館学領域の研究で

¹ 新村出編著『広辞苑〔第2版補訂版〕』岩波書店、1976。

は到達できなかった点を明らかにすることができた。なお本稿の書き進め方は、基本的にこの言葉の足跡を、現代から時代を遡る形になっている。

2. 日本図書館界の「供給・需要」論：前川恒雄の「供給が需要を生む」とその伝播

前川恒雄（1930-）は、1965（昭和40）年から1974（昭和49）年まで、東京都日野市の図書館長として勤務した。1963（昭和38）年刊行の『中小都市における公共図書館の運営』²で述べられた、資料提供の理念を具体化し、実践を通してその理論の正しさを明らかにした人物である。また、戦後の日本図書館界を発展させた功労者の一人と言えよう。日野市立図書館長の後に、1974（昭和49）年から日野市の助役、1980（昭和55）年から1991（平成3）年まで滋賀県立図書館の館長も務めた。

その前川の発言に着目した嶋田学が、2006（平成18）年に『「文化は供給があってはじめて需要が生まれる』とは前川恒雄氏の言葉』³と述べた。それに対して、前川本人が記憶ではそれは「マッコルビンの言葉である」⁴と応じている。嶋田がこれを前川の言葉とした背景には、滋賀県文化振興課長だった上原恵美の新聞記事や、当時滋賀県知事だった武村正義の著書『私はニッポンを洗濯したかった』があると、後に嶋田が書いている⁵。

まず、嶋田が根拠としている2005（平成17）年10月13日の毎日新聞を確認する。この記事には上原の半生が綴られている。「上原さんによると前川語録があり、どれも含蓄に富む。あえて一つだけあげると『文化は供給があって初めて需要が生まれる』」⁶と書かれている。次に武村の著書を確認すると、「前川さんの『供給が需要をよびますよ』という言葉は印象的だった。要するに、利用しやすい図書館を多く整備すれば、読書人口も増えていくということだ。確かにその通りになった」⁷と書かれている。前川は、1980（昭和55）年に滋賀県立図書館長に就任しているから、その当時の話であろう。

前川自身の著作から探してみると、1969（昭和44）年の論稿に次のようにあった。「本を読まない市民を読書に近づける活動、読書の内容を高める活動は、図書館サービスの重要な一面である。（中略）最も基本的な方法は図書の提供そのものによって読書を普及させることである。『供給が需要を生む』という正攻法である。質の高い図書を市民の身近におき、

² 日本図書館協会中小公共図書館運営基準委員会『中小都市における公共図書館の運営—中小公共図書館運営基準委員会報告』日本図書館協会、1963。

³ 嶋田学「市民自治を目指す公共政策としての図書館」『図書館界』58(1), 2006.5, p. 23。

⁴ 前川恒雄「『供給が需要を生む』という言葉」『図書館界』58(2), 2006.7, p. 113。

⁵ 嶋田学「『供給が需要を生む』という言葉についての説明」『図書館界』58(5), 2007.1, p. 283。

⁶ 毎日新聞 滋賀県版「じぶんさがし：新・近江物語〈女〉とアート～上原恵美の挑戦」2005.10.13, 毎日新聞データベース「毎索」, 地方版滋賀, [引用：2018-11-17]。

⁷ 武村正義氏『私はニッポンを洗濯したかった』毎日新聞社、2006, p. 103。

要求された図書を必ず貸すことである」⁸と書いている。図書館が本すなわち資料を供給することで、住民の資料に対する需要が生まれるというのである。

のちに前川は、「図書館が町にできると、町は変わる。利用者が生まれるのだ。もともと本を読んでいた人は、もちろん利用者になる。だが、図書館ができて町民自身が気がつくのは、図書館ができたから、図書館があるから、本を読むようになるという事実である」⁹とも書いている。図書館が読書環境を提供したから、読書への需要が生まれたと解釈できる。

また「例えば、滋賀県立図書館へ私が行きました頃、非常に手薄だったのは家庭の実用書でした。家庭の実用書などをばかにする図書館員がいますけれど、ばかにできないですね。とてもいい本がある。しかも、我々にとって衣食住は生活の基本ですから、そういう本の値打ちというのがわからなければいけないと思うのです。とにかく、家庭の実用書を買ったのです。そうしますと、要求が出てくるのですね。こういう本も買って欲しいという要求が、どんどん出てくる」¹⁰と書いている。ここでは、「供給」も「需要」も使っていないが、図書館が家庭の実用書を供給することで、住民に実用書への需要が生まれるという趣旨を述べていることがわかる。

筆者は前川の著書6冊、『前川恒雄著作集』（出版ニュース社、1999）全4巻および『われらの図書館』（筑摩書房、1987）、『移動図書館ひまわり号』（筑摩書房、1988）を調べた。その中には「供給が需要を生む」とは書いてはいないが、根底にこの考えがあると思われる記述が数箇所あった。一方で明らかに「供給が需要を生む」という言葉を使って書いたのは、上記引用の1969（昭和44）年に書かれた論稿だけである。筆者の見落としがなければ、意外と少ない。また、この言葉を正面から扱い解説した文章を発見することができなかった。こうしたことから推察すれば、前川が書いたものではなく口頭で述べた「供給が需要を生む」が日本の図書館界に広まったようである。

ところで、前川が述べたとされる、供給と需要の対象は何であったか。つまり、何を供給すると何の需要が生まれるのかを考えてみたい。この文言は、簡潔な表現であるがために類推を要する。そこで、前川が資料の提供を公共図書館の本質的な機能であると考え¹¹人物であることを考慮して、書物ないし資料が対象であると仮定すると意味がよく通る。つま

⁸ 前川恒雄『図書館の変革』（前川恒雄著作集3）出版ニュース社、1999、p.102。初出「公共図書館の発展を」『図書館雑誌』63(1)、1969.1。

⁹ 前川恒雄『人間の図書館へ』（前川恒雄著作集4）出版ニュース社、1999、p.182。初出「地方自治と図書館の働き」『地方財務』495、1995.8。

¹⁰ 前川恒雄『図書館の世界』（前川恒雄著作集2）出版ニュース社、1999、p.101-102。

¹¹ 例えば、「公共図書館は誰が何のためにつくったものであろうか？ 明らかに市民が図書その他の資料を入手するためにつくったものである。図書館が他のあらゆる機関と違った存在理由を主張できるのは『資料を提供する』という働きによるのである」と書いている〔前川恒雄、前掲8、p.95〕。

り、資料を供給すると資料への需要が生まれるというのだ。また、知事だった武村に述べた際には、「図書館サービス」を対象としていると想定すると、意味が判りやすい。この場合の図書館サービスは特別な意味ではなく、資料・情報提供を中心として、レファレンス・サービス（調査への援助）、集会活動などを意味する。このような図書館サービスを供給することにより、新たな図書館サービスを求めるつまり需要を呼ぶ、という意味で述べたと思われる。

3. 英国図書館界における「供給・需要」論

3-1 マッコルヴィンの「供給が需要をつくった」

前川の言葉の基になったのは、ライオネル・ロイ・マッコルヴィン（Lionel Roy McColvin, 1896-1976）の言葉である。彼は、1938年から1961年まで、ロンドン市内最大のウェストミンスター図書館の館長を務めた。1942年に『イギリスの公共図書館システム』を発表して、名前が知られるようになっていく。また、各国語に翻訳された¹²という『読書の機会（*The Chance to Read*）』（以下、'*The Chance to Read*'）を1956年に発表している。ただ、この文献には邦題があるにも関わらず、筆者の調査では、日本で翻訳本が公刊された形跡が認められない¹³。

前川は「供給が需要を生む」を、このマッコルヴィンの言葉としたのだが、その出典について明記していない。嶋田は2007（平成19）年1月の論稿で、森耕一著『図書館の話』を参考にして、マッコルヴィンの主張を紹介し、その出典を '*The Chance to Read*' と¹⁴記載している。そこで森耕一（1923-1992）の『図書館の話』をひもとくと、以下のように述べている。

1850年にイギリスで、図書館法が成立した。その事情について、森耕一は次のように書いている。図書館法成立の原動力の捉え方、「その一つは、サヴェージで代表される、『出版社から提供される廉価本または職工学校から借り出した本によって、図書館の価値を知った下層中流階級および労働者階級が、公共図書館の真の創始者であった』とする考えです」¹⁵と記している。また「それに対して、『民衆の要求によって初期の公共図書館がつくられたという証拠はない。むしろ、国民の大多数は公共図書館に反対か、よくしても、それは少数の声

¹² 藤野幸雄編著『世界の図書館百科』日外アソシエーツ、2006、p.510右。

¹³ 国立国会図書館のWeb OPACやCiNiiで「読書の機会」を検索しても、ヒットしない。[確認：2018-11-17]。

¹⁴ 嶋田学、前掲3、p.283。

¹⁵ 森耕一『図書館の話』至誠堂、1966、p.142。

であって、大衆からの要求ではなかった』(Murison, W. J. *The public library*)¹⁶ という見方が他方にあります¹⁷と、森は述べるのである。ちなみに、ここに登場したサヴェージとは、英国エディンバラの図書館長を務めたアーネスト・サヴィジ (Ernest Savage, 1877-1966)¹⁸であろう。

その上で森は、「マッコルヴィンも、マリソン¹⁹と同様、『公共図書館法の成立は、ほとんどまったく三人の人物の努力の結果であった。……かれらのほかに、公共図書館に対する要求はなかった』(McColvin, L. R. *The chance to read*) とする立場をとっています。ほとんどすべての図書館またはその類似施設が有料・私営であった当時において、無料公開の公共図書館がなにをなし得るか、なにを意味するかということについて、民衆は何もイメージをもっていないませんでした。民衆が、自分たちでイメージも浮かばないようなものを要求するはずがありません。そこで、マッコルヴィンは、近代図書館の創設は、『需要のあるところに供給が生まれたのではなく、供給が需要をつくったというケースである』と述べています²⁰と記した。

ところで、森のこの引用には精緻な注がつけられていない。読みやすさを重視したからであろうが、何ページからの引用であるかが記載されていないのである。だが、出典は‘*The Chance to Read*’であることだけはわかる。また、この文献の日本語訳が見当たらないことから推定すると、森が‘*The Chance to Read*’の一部を訳して『図書館の話』に載せたと思われる。

河井弘志もマッコルヴィンの同じ文章を引用している²¹。だが、出典は森耕一の『図書館の話 (改訂版)』からであり、マッコルヴィンの‘*The Chance to Read*’からではなかった。また、薬師院はるみも同様にマッコルヴィンの原著からではなく、森耕一の『図書館の話』から「需要のあるところに供給が生まれたのではなく、供給が需要をつくったというケース」という文章を引用している²²。ここで不思議なのだが、なぜか原著者であるマッコルヴィンの原書およびその日本語訳からの引用が見当たらない。また「というケース」との表

¹⁶ 森は、図書館の目録規則に則って、ファミリーネーム (姓)、コンマ、ファーストネーム (名)、ミドルネーム (中間名) の順に記していると思われる。また、書名の大文字の使い方も目録規則に準拠したと思われる。そのままの形で引用した。以下においても同様である。ただし、筆者自身の文章では、慣例に倣って、英米人はファーストネーム、ミドルネーム、ファミリーネームの順で、また英文書名は前置詞等を除き一語一語の頭文字を大文字とした。Murisonは、下記注19を参照。

¹⁷ 森耕一、前掲15, p. 142。

¹⁸ 藤野幸雄編著、前掲12, p. 214右。

¹⁹ マリソンとは詳しいことは不明であるが、アルファベットでW. J. Murisonと綴る図書館研究者であろう。(アリスティア・ブラック、藤野寛之翻訳・解説『新・イギリス公共図書館史—社会的・知的文脈1850-1914』日外アソシエーツ、2011, p. 483。)

²⁰ 森耕一、前掲15, p. 144-145。

²¹ 河井弘志「L. R. マッコルヴィンの図書選択論」『図書館界』29(2), 1977.7, p. 40。

²² 薬師院はるみ「一区一館制度の成立：名古屋市の図書館行政に関する歴史的再検討」『京大大学生涯教育学・図書館情報学研究』6, 2007, p. 6。

現は、何らかの理論に関する具体例と思われるのだが不明である。

そこで ‘*The Chance to Read*’ の原文を調べた。次のように記載されている箇所がある。

“First of all I would emphasize that the passing of this Act was the result, almost entirely, of the efforts of the three men mentioned. It was the personal achievement of well-informed, indomitable enthusiasts. Apart from these there was no *demand* for public libraries. The people did not ask for public libraries. Why *should* they do so? —they had no idea of what a public library could do or mean. They did not know that they needed or would use it. They did not, on the whole, even know that books had anything worth while to give them. It was only when there were public libraries that most people had any realization that they had anything to give. In other words here is, definitely, a case when supply created demand, not where demand created supply. And the same, let us never forget, is true today in every country in the world, be it Indonesia or Italy, Pakistan or Peru.”²³ (イタリックは原著。下線、筆者。)

このマッコルヴィンの叙述は、筆者が先に引用した森の『図書館の話』の文章と合致する。森がマッコルヴィンの ‘*The Chance to Read*’ から引用した、「需要のあるところに供給が生まれたのではなく、供給が需要をつくったというケースである」は、引用文の下線部分である。そして、森は “created” を「生んだ」ではなく「つくった」と書いている。

このように森が引用した箇所は、マッコルヴィンがイギリス図書館法の成立過程について述べたところであった。図書館を無料で利用できる法律を国民が要求したのではなく、三人の尽力で法律を作り図書館サービスを提供した経緯を述べている。イギリスでは、図書館サービスをまず供給したことで、図書館サービスに対する国民の需要を生んだというのである²⁴。

²³ Lionel R. McColvin, *The Chance to Read: Public Libraries in the World Today*, London, Phoenix House, 1956, p. 23.

²⁴ ただし、アリスティア・ブラックが次のように述べている。「無料で公衆に開かれる図書館の設立は1850年にあっては斬新なアイデアではなかった。1850年の「公共図書館法」（および、それに先行した特別委員会の仕事）は、しばしば語られてきたごとく、偉大な転機として見なすべきではない。公共図書館の思想は1820年代、1830年代、1840年代に何度となく取り上げられていたものであり、以下に述べられる1849-50年の出来事は、出発点であるとともに終着点であった。まったくの無料の図書館サービスの提案は、一夜にして現れたわけではなく、それは、職工学校であろうとコーヒーハウス、地域の貸出図書館、あるいは、チャーチストたちの読書室であろうと、こうした様々な社会・政治・教育の機関がその会員たちや賛同者たちにたいして作りあげてきた独立の図書館設置という健全な伝統を背景として出現してきたものである。」[アリスティア・ブラック、前掲19, p.38]。ブラックの見解を言い換えれば、公共図書館の成立が単に法律の成立によってもたらされたのではない。その背景があるとしている。無視することができない見解である。

ちなみに、三人とは誰か。森は、「この法律が成立したことについては、図書館人としてエドワード・エドワーズ、下院議員のウィリアム・エワート²⁵とジョセフ・ブラザートン、これら三人の人物の絶大な努力に負っています」²⁶と書いている。

ここで、需要と供給の対象を確認しておく。マッコルヴィンが、何を供給することで、どんな需要をつくったと考えたのであろうか。文脈から推し量ると、供給と需要の対象は同じであり、「図書館サービス」とするのが妥当であろう。一方で、前川の言葉の場合は、資料を対象としていると思われる場合と、マッコルヴィンと同じように図書館サービスを対象としている場合がある。いずれにしても、前川とマッコルヴィンは、供給と需要の対象を同じ事物を想定している。つまり、前川にしてもマッコルヴィンにしても、図書館に関わるAを供給すれば同じAという需要が生ずるとしているのである。換言すれば、Aの供給がそれ自体の需要を生む（もしくは、つくる）と、表現することもできる。

ただ前川は、“created”を森の訳のように過去形の「つくった」とはせず、「生む」と表現して現在形にした。マッコルヴィンはある事例、つまりイギリスにおいて図書館法が成立し図書館が設置され利用されるようになった過去の事実の説明として、「供給が需要をつくった」としたのである。それに対し前川は、わずかな加工を施し現在形にした。前川の解釈と応用によって、マッコルヴィンの言葉が、多くの事象一般に適用可能とする法則的表現になったと思われる。

それでは、マッコルヴィンはこのフレーズをどこから見つけたのであろうか。マッコルヴィンの説明は、どこかで使われているフレーズを図書館に当てはめたような文章である。もちろん、マッコルヴィンの創作と考えられなくはない。だが「というケース」という表現が、他にも同様のケースがあるような意図が感じられる。

3-2 アーカートの「供給は需要を創る」

イギリスの図書館界では、マッコルヴィンが生まれた13年後に、アーカート（Donald John Urquhart, 1909-1994）という学術図書館に新時代を築いた人物が生まれている²⁷。彼は『図書館業務の基本原則』で18の基本原則を説き、3番目に「供給は需要を創る」を掲げた²⁸。この『図書館業務の基本原則』の原著は、‘*The Principles of Librarianship*’として

²⁵ William Ewart, 1798-1869. 藤野幸雄編著『世界の図書館百科』（前掲12, p.554左右）では、「ユーワート」とカタカナ表記している。

²⁶ 森耕一、前掲15, p.137。

²⁷ 藤野幸雄編著、前掲12, p.7左右。

²⁸ D. アーカート（高山正也訳）『図書館業務の基本原則』勁草書房、1985, p.3。

1981年に出版されている。それに対し、同じように図書館の供給と需要について触れたマッコルヴィンの‘*The Chance to Read*’は、アーカートの‘*The Principles of Librarianship*’よりも25年も前の1956年の出版である。つまり、マッコルヴィンがアーカートに影響を与えた可能性は高いが、その逆の可能性は無いと考えるべきである。

『図書館業務の基本原則』は、アーカートが初代館長として関わった国立科学技術貸出図書館などの実践から導き出した、図書館業務の基本原則について述べている。ただ、基本原則「供給は需要を創る」の由来や意味は書かれていない。彼が勤めた図書館の状況を説明して、以下のように述べている。

「この図書館からの供給は、蔵書が改善されるにつれて、年ごとによくなっていった。これは次表に示すように、目立って需要を増大させた。

（文献の要求総件数増加を示す表：筆者省略）

明らかに供給が需要を創り出していると言える……。」²⁹

「供給が需要をつくるという法則は、精確な数学的関係をあらわすものではない。疑いなく、NLLからの提供が改善されるにつれて、需要は増大した。」³⁰

NLLとは、アーカートが勤務した国立科学技術貸出図書館（The National Lending Library for Science and Technology）³¹のことである。NLLは、1973年にブリティッシュ・ライブラリーの傘下に入って文献供給部門になっている³²。このようにアーカートは「供給が需要を創る」という基本原則を、NLLの事例で説明している。だが、この基本原則を誰がどのような場面で使ったのか、歴史的言及が全くない。つまり、マッコルヴィンが同じことを述べているとか、マッコルヴィン以前に先行した論者がいるということには、一切触れられていないのである。

ただ、アーカートは「供給が需要をつくるという法則は、……」と書き、まさに「法則」と述べた。意味内容としては、事例を説明したマッコルヴィンと同じではあるが、現在形を用い「法則」として一般化した表現をしている。前川が、アーカートからこの法則表現を学んだのか。しかし、先に引用した前川の『『供給が需要を生む』という正攻法……』という文章は、1969（昭和44）年に書かれている。それに対し、アーカートは前掲の著書をイギリ

²⁹ D. アーカート、前掲28、p. 45。

³⁰ 同上、p. 112。

³¹ 同上、p. iii。

³² 藤野幸雄編著、前掲12、p. 199右。

スで1981年に刊行した。前川のほうが12年先に、法則的表現をしているのである。やはり、前川はマッコルヴィンから学び、独自に法則的表現に加工したと見るべきである。

ところで、アーカートの基本原則9は「図書館は収穫逡減の法則にも関心を払わなければならない」³³となっている。収穫逡減の法則を調べるために、図書館学の辞典類（『最新図書館用語大辞典』柏書房、『図書館情報学用語辞典〔第4版〕』丸善、『図書館ハンドブック〔第6版補訂版〕』日本図書館協会）を開いてみるが、「収穫逡減の法則」もしくは「収穫逡減」の項目がない。ところが、ハンディな『有斐閣経済辞典』には「収穫逡減」「収穫逡減の法則」「収穫逡増」の項目がある³⁴。つまり、「収穫逡減の法則」は経済学の用語と理解すべきなのである。

そこで、経済学的表現に注目してアーカートの基本原則を拾い上げてみる。原則7は「図書館は、個別にも図書館のグループとしても、費用対効果について関心を払わなければならない」であり、原則8は「情報は、原則として、貨幣額で価値づけできないものである」と記載され、そして原則11は、「特定の活動に要する原価は、活動の規模が大きくなるにつれて、低減すべきである」と述べられている³⁵。「費用」「貨幣」「原価」と、経済もしくは経済学の用語が頻繁に使われているのである。

マッコルヴィンが使った「供給」や「需要」も、経済学でよく使われる用語である。マッコルヴィンやアーカートのようなイギリスの図書館人は、経済用語もしくは経済学用語を、好んで用いたようである。しかし、経済学または経済用語を多用するアーカートは、物理学で博士の学位を取得し、後に鉄鋼協会の調査部に席を置いた人物である³⁶。マッコルヴィンにしても、大学などで経済学を学んだ経歴は見つけられない。だが、「イギリスでは公共図書館運動の指導者エドワーズ（Edward Edwards）が、図書館の管理運営にかかわる業務を整理し導き出された専門知識体系にライブラリーエコノミーという語を与えた。ここでライブラリーエコノミーという語に与えられた意味は、図書館の効率的運営にかかわる方法論であった」³⁷という。

ライブラリーエコノミーは、内容的には図書館経営に近いが、直訳すれば図書館経済である。エドワード・エドワーズ（1812-1886）は、大英博物館の図書館に勤めた経験を持ち、1850年の公共図書館法成立に貢献し、1851年にはマンチェスター公共図書館の初代館長に

³³ D. アーカート、前掲28, p. 3。

³⁴ 金森久雄・荒憲治郎・森口親司編『有斐閣経済辞典（第4版）』有斐閣、2002, p. 565左。

³⁵ D. アーカート、前掲28, p. 3-4。

³⁶ 藤野幸雄、藤野寛之『図書館を育てた人々 イギリス篇』日本図書館協会、2007, p. 186-186。

³⁷ 吉田右子・川崎良孝「図書館情報学」『図書館ハンドブック〔第6版補訂版〕』日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編、日本図書館協会、2010, p. 33左。

なった人物である³⁸。こうした実績をもつエドワーズが、初期の図書館学をライブラリーエコノミーと称した。それゆえ、イギリスの図書館界で、経済用語や経済法則が使われているのは、不思議なことではないのだろう。

4. 欧米経済学における「供給・需要」論

4-1 ケインズの「供給はそれみずからの需要を創造する」

「供給」や「需要」という用語は、経済学でよく使われる用語である、そこで経済学に目を転じると、「セイの法則（セー法則，Say's law）」³⁹と言われる理論がある。セイの法則というのは、「ケインズによって〈供給はそれみずからの需要をつくり出す〉という形で定式化され、セー法則と名づけられた」⁴⁰という。

ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes, 1883-1946. 以下、ケインズ）は、1936年に主著『雇用・利子および貨幣の一般理論』（以下、『一般理論』）出版した。この中でケインズは、古典派の経済学者の考えを「供給はそれみずからの需要を創造する」と、簡潔に表現している。これを図書館長マッコルヴィンが読んだのか、何らかの機会にケインズの研究成果の知識を得たのではないかと筆者は推定した。その論拠は以下のとおりである。

ケインズは、イギリスのケンブリッジに生まれた。偶然にも、ケインズ、マッコルヴィン、アーカートの生年差は、それぞれ13年である。ケインズの『一般理論』は、マッコルヴィンの『*The Chance to Read*』よりも20年前に出版されている。ケインズは1941年イングランド銀行理事、1944年にはブレトン・ウッズで開かれた連合国通貨金融会議にイギリスの首席代表として出席した⁴¹。『一般理論』の出版当初は既存の経済学者からの評価は意外に低かったが、若い経済学者に受け入れられ、ケインズの亡くなった翌年の1947年には「ケインズ革命」という言葉が生まれている⁴²。そして「20世紀前半を代表する近代経済学者」⁴³となった。図書館長だったマッコルヴィンの生年は1896年であるから、単純に1947年から引き算すれば、「ケインズ革命」と言われ始めたころ彼は51歳だったことになる。ケインズのこ

³⁸ 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学会用語辞典〔第4版〕』丸善、2013、p.18右-19左。

³⁹ 英語で書けば“Say's law”であるが、日本語表記では「セイの法則」「セイ法則」「セーの法則」「セー法則」と4通りがある。本論文では、引用の関係で種々の表記が混在している。

⁴⁰ 溝川喜一「セー法則」大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典〔第3版〕』岩波書店、1992、p.803左。

⁴¹ 伊東光晴「ケインズの経済学」熊谷・篠原編集代表『経済学大辞典〔第2版〕』Ⅲ、東洋経済新報社、1980、p.599左。

⁴² 伊東光晴「ケインズ学派」大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典〔第3版〕』岩波書店、1992、p.344右。

⁴³ 伊東光晴「ケインズ」同上、p.343左。

うした経歴からすれば、同国の図書館長だったマッコルヴィンが、『一般理論』を知らないということは逆に不自然である。したがって、マッコルヴィンの「供給が需要をつくった」は、ケインズの影響と考えておかしくはない。

ではケインズはどのように書いていたのか。『一般理論』には、「セイやリカードの時代から古典派経済学者たちは、供給はそれみずからの需要を創造すると教えてきた」⁴⁴と書かれている。原著では、“From the time of Say and Ricardo the classical economists have taught that supply creates its own demand”⁴⁵とある。ところが、この根拠としてケインズが引用しているのは、セイ (Jean Baptiste Say) やリカード (David Ricardo) ではなく、J. S. ミル (John Stuart Mill) の『経済学原理』である⁴⁶。一考すると、セイの法則なのでミルの著作を引用するのは適切ではない。ただ、ケインズはセイの法則をセイやリカード、ミル等の古典派経済学の公準と見なしていた⁴⁷のであり、不適切とまではいえないのである。

ところで「セイの法則」とはどのような法則なのか。岩波の『経済学辞典〔第3版〕』によれば、広い意味でのセイの法則には2種類ある。第1は、「販路法則（または販路説）」⁴⁸である。販路法則については、セイがその著書 ‘*Traité d’économie politique*’ (増井幸雄訳『セイ経済学』)⁴⁹で述べたことである。岩波の辞典では、販路法則を次のように説明している。「生産者が自己の生産物を販売して支払いを受けることができるためには、他の人びとがそれを獲得するだけの資力を持っていなければならぬ。この資力は、その人びとの生産物

⁴⁴ J. M. ケインズ (塩野谷祐一訳)「雇用・利子および貨幣の一般理論」『ケインズ全集第7巻』東洋経済新報社、1983、p. 18。

⁴⁵ John Maynard Keynes, *The General Theory of Employment Interest and Money*, New York, Cambridge University Press for the Royal Economic Society, 1974, p. 18. (The Collected Writings of John Maynard Keynes 7). 初版は1936年。

⁴⁶ J. M. ケインズ、前掲44、p. 19。「商品に対する支払手段を構成するものは商品にほかならない。各人が他の人々の生産物に対して支払う手段は、彼自身が所有する生産物から成り立っている。すべての売手は不可避免的に、そしてその言葉の意味どおりに、買手である。(中略) あらゆる人々が2倍のものを購入することができるのは、あらゆる人々が交換において提供するものを2倍もっているからである」とし、典拠をミルの『『経済学原理』第3編 第14章 第2節』と、明確に記している。

⁴⁷ 有井治「セイの法則とケインズ理論」『成城大学経済研究』(53)、1976.3、p. 69。

⁴⁸ フランス語表記は、例えば『経済学辞典〔第3版〕』(大阪市立大学経済研究所編、岩波書店、1992、p. 803左)では、“loi des débouchés”。また、例えば『大月経済学辞典』(経済学辞典編集委員会編、1979、p. 783右)では“théorie des débouchés”となる。日本語表記では、「販路法則」「販路の法則」、「販路説」となる。

⁴⁹ 日本語書名は、『増訂新版 経済思想史辞典』(堀経夫編、創元社、1959、p. 342下)では『経済学要綱』としている。また、『大月経済学辞典』(経済学辞典編集委員会、大月書店、1979、p. 547左)では、『経済学概論』とも表記している。

によって得られる。したがって、生産物は生産物によって支払われるのであり、生産物に対して販路を開くものは生産である]⁵⁰ というのである。

それに対して第2のセイの法則は、狭義のセイの法則である。以下のように書かれている。「販路法則は、ケインズによって〈供給はそれみずからの需要をつくり出す〉という形で定式化され、セー法則と名づけられた。そして、古典派経済学の基礎的命題として位置づけられ、必ずしもそれが本来持っていなかった重要性を与えられた」⁵¹ というのである。以上を整理すると、セイの法則とは、①販路法則、②ケインズによって定式化された狭義のセイの法則、そして、①と②を含む③広い意味でのセイの法則がある。

ただ、上記②の見解とはやや異なる見方もある。「こんにちではセーの法則として知られる表現を借りて言うなら、『供給はそれ自身の需要を生み出す』のだ。じっさいにはセーはけっしてこうした言いかたはしなかった。おそらくこれは、1921年にアメリカの経済学者フレッド・テイラーが、その著書『経済学原理』で考案したものだ」⁵² との見解である⁵³。ケインズの前に、テイラーが考案したというのである。

また、「今日、販路説とセー法則という二つの言葉は、同義語として使用されることが多いけれども、販路説とか販路法則という用語は、本来、セーが販路の理論 *théorie des débouchés* とよんだものであり、イギリスの経済学にセー氏の原理 *Say's principle* として流入したもの」⁵⁴ だという。つまり、イギリスではケインズ以前に、販路法則をセイの原理として経済学の世界では知られていた。

セイの法則を考案したのがテイラーかケインズかについてはさておき、ただ明確なのは、今いわれるセイの法則を広めたのはケインズなのである。セイの著書、邦訳書名『セイ経済学』の原著が出版されるのは、初版が1803年である。『セイ経済学』の初版からケインズの『一般理論』の間には、130年以上の月日がある。この間に批判がなされて当然であるし、その際には批判対象の考えを整理するのは一般的になされることである。イギリスの経済学界で知られていたとか、またアメリカではセイの理論をテイラーが整理したとしても、何ら不思議ではない。また、「じっさいにはセーはけっしてこうした言いかたはしなかった」のも確かであり、ケインズはセイが述べていないことをセイの法則として扱い広めたといえる。

⁵⁰ 溝川喜一、前掲40、p.802右。

⁵¹ 溝川喜一、前掲40、p.803左。

⁵² ナイアル・キシテイニーほか（小須田健記、若田部昌澄日本語版監修）『経済学大図鑑』三省堂、2014年、pp.74右-75左。

⁵³ テイラーなる経済学者については、身近にある事典類には掲載されていない。この点の研究は、筆者の力量を超えているし、本稿の趣旨から逸脱しかねないので、見解の紹介にとどめる。

⁵⁴ 溝川喜一『古典派経済学と販路説』ミネルヴァ書房、1966、p.6。

ここで、押さえておくべきことは3点ある。まず、①広い意味でのセイの法則は、(a)販路法則と(b)狭義のセイの法則である。②セイが述べたのは販路法則であって、狭義のセイの法則ではないこと。③狭義のセイの法則すなわち「供給はそれみずからの需要を創造する」は、ケインズによって広く知られるようになったことである。

4-2 セイの「生産物は、……種々なる需要を発生せしむ」

マッコルヴィンは、ケインズではなくセイの著作から「供給が需要をつくった」という言葉を学んだ可能性もある。セイ（1767-1832）は、フランスの経済学者であり、アダム・スミスの『諸国民の富』をフランスに紹介した人物である。1789-1799年のフランス革命を体験し、ナポレオン執政政府の委員となる。在職中の1803年に '*Traité d'économie politique*' を出版したが、ナポレオンの財政政策と対立し修正を拒否して辞職、その後に紡績業を営みナポレオン失脚後に学界に復帰している⁵⁵。

セイの '*Traité d'économie politique*' の日本語版『セイ経済学』（増井幸雄訳）の第1篇の第15章が、「販路に就いて」となっている。もちろん、ケインズが知らしめた「供給はそれみずからの需要を創造する」という表現は見られない。ただ、それに近いと思われる文章を探せば、「一たび創造せられたる生産物は、風俗に依り欲望に依り将た一国内の資本・産業・土地の状態に依りて定めらるゝ種々なる需要を発生せしむ」⁵⁶ とある。この「需要を発生せしむ」と、マッコルヴィンが述べた「需要をつくった」とは、近似した表現である。また「創造」という語も使われている。別の箇所では、「売られざる商品、又は損失を忍んで売らるゝ商品は、或は其の分量の過大なるが為めに、或は寧ろ他の生産の振はざるが為めに、其の供給量が之に対する需要量を超過し居れるなり」⁵⁷ とある。「供給」と「需要」がセットで使われている。

しかし、セイは「種々なる需要を……」と書き、ある生産物とは異なる種類の生産物の需要を発生させると解釈すべきである。つまり「セイ自身は、貨幣は単なる交換の媒介物であり、実際は生産物によって生産物を買われるのだから、ある生産物の売れ行きを良くするには他の生産物を十分に供給すればよいと考えて」⁵⁸ いるのである。本稿3-1で筆者は、マッコルヴィンや前川は、供給と需要の対象は同じであるとした。それに対し、セイは、供給とは

⁵⁵ 時永淑「セー」大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典〔第3版〕』岩波書店、1992、p.762右。

⁵⁶ ジャン バティスト セイ、増井幸雄 訳『セイ経済学』上巻、岩波書店、1926（原著初版1803、同第6版1841）、p.320。

⁵⁷ 同上、p.308。

⁵⁸ 喜多見洋「ジャン＝バティスト・セー：セー法則の本当の意味は通説と異なる」『エコノミスト』90（17）、2012.4、p.57。

異なる需要が発生すると主張している。

ここで、マッコルヴィンの「供給が需要をつくった」という言葉を、セイから学んだかケインズから学んだか否かという問題に立ち返ると、セイから学んだ可能性は無いことがわかる。セイ自身は、ある生産物の供給はそれとは異なる他の需要を促進すると主張しているのである。つまり、供給と需要の対象が異なる。それに対してマッコルヴィンの意図は、供給と需要の対象が同じである。一方で、セイの生誕から116年後に生まれたケインズは、古典派経済学の公準としてセイの主張とは異なるセイの法則を世に広く知らしめた。

ケインズの『一般理論』は世界的によく知られていたものであり、同国人で13歳下の図書館職員だったマッコルヴィンが『一般理論』の記述を知りえた可能性は非常に高い。ゆえにマッコルヴィンは、セイではなくケインズの著作から何らかの影響を受けて「供給が需要をつくった」と書いたと考えるのが自然である。そして、ケインズが広めたセイの法則の1つの具体的な例として、イギリスにおける図書館法の成立過程を取り上げた。したがってマッコルヴィンは「というケース (a case)」と書いた、とする推理が可能である。

5. おわりに

これまで述べたことを、時代の流れに沿って整理してみると以下のようなになる。

まず、フランス古典派経済学者セイが、「一たび創造せられたる生産物は、風俗に依り欲望に依り将た一国内の資本・産業・土地の状態に依りて定めらるゝ種々なる需要を発生せしむ」と販路法則を主張した。これがセイ氏の理論として、イギリス経済学界で知られていた。また、セイを含む古典派経済学の考えを、セイの著作の初版から118年後にアメリカのテイラーが簡潔な表現で述べたらしい。そしてテイラーの著書出版の25年後には、ケインズがセイを含めた古典派経済学の理論を、「供給はそれみずからの需要を創造する」と定式化して世界に広めた。ただ内容的にはセイの主張とは異なっている。セイの意図として「他の」と主張した部分を、ケインズかテイラーかどちらかが「それみずから（自身）の」とした。しかし、これが「セイの法則」として広まったのである。

ケインズの『一般理論』の20年後にセイの法則は、経済学から図書館界に舞台を移している。イギリスの公共図書館長マッコルヴィンが、「需要のあるところに供給が生まれたのではなく、供給が需要をつくったというケースである」と書いた。文脈から、供給と需要の対象は同じで図書館サービスを意図していると思われる。「それみずからの」は削除した。ただし、「供給」と「需要」の対象は共に図書館サービスと推定すべきであり、狭義のセイの法則にある「それみずからの」を省いても内容としては同じである。ケインズの法則的表現「創造する」を、マッコルヴィンは歴史的事例紹介の文脈で使い「つくった」としたのだら

う。

ただし、ケインズの著作をマッコルヴィンが読んだか否かは不明である。しかし、マッコルヴィンが、ケインズの著作に触れる機会があったことが十分推察できる。なぜなら、マッコルヴィンが①ケインズと同じイギリスに住んでいたこと、②館長として本を扱う図書館に勤めていたこと、また③ケインズと生年が近いことである。さらには、④マッコルヴィンが1956年に‘*The Chance to Read*’を発表する9年前の1947年には、「ケインズ革命」として一世を風靡したことである。

マッコルヴィンが‘*The Chance to Read*’を発表した10年後には、イギリスから日本に舞台が移っている。日本の図書館学者であった森耕一が、マッコルヴィンの言葉をおそらく森自身が訳出して引用したと思われる『図書館の話』を1966年に刊行した。それから3年ほどして、日野市立図書館長だった前川恒雄の著作に登場する。その前から、講演会などで話していた可能性はあるのだが不明である。その際に、前川がマッコルヴィンの言葉を法則的表現に仕立て直している⁵⁹。「供給が需要を生む」としたのである。供給と需要の対象は、文脈から資料または図書館サービスを意味したと思われる。原語の“created”を、「つくった」ではなく「生む」として過去形を現在形にして、法則的表現を施している。

その後に前川は活動の拠点を、東京日野市から滋賀県に移した。前川が1980年頃に話した言葉が、「供給が需要をよびます」であった。これは、元滋賀県知事武村正義の記憶である。また滋賀県職員だった上原恵美は、「文化は供給があって初めて需要が生まれる」と解釈したようで、その上原の語りを毎日新聞記者が記事にしている。対象が「文化」となっていて、「初めて」も加わっている。前川が法則的に表現したことによって、前川の話し言葉が様々に変化して記録された。

前川が滋賀県に拠点を移した頃の1981年、舞台はイギリスに戻る。イギリスの科学技術文献を扱う図書館長を経験したアーカートは、「供給は需要を創る」と書いた。マッコルヴィンに倣ったのかどうかは不明である。ケインズや前川と同じく、法則的表現を採用している。この言葉は、前川の「供給が需要を生む」と訳語が若干違うだけで、意味するところは同じと言ってよい。著作の出版年だけから推定すると、アーカートが前川から学んだ可能性

⁵⁹ ただ、前川恒雄が森耕一の『図書館の話』を読んで、「供給が需要を生む」と言うようになったか否かは不明である。そこで筆者が、森の『図書館の話』が出版された1966年以前の、前川の著作を読んでみた。なお、著作に当たるにおいては、國松完二編「前川恒雄先生著作目録」〔『いま、市民の図書館は何をすべきか 前川恒雄さんの古希を祝して』前川恒雄先生古希記念論集刊行会、出版ニュース社、2011、p.390-403〕を参考にした。筆者が目を通した限りでは、1966年以前の前川の著作には、「供給が需要を生む」という文言、および似通った表現の記述は見当たらない。森の『図書館の話』を読んで、マッコルヴィンの「供給が需要をつくった」を知った可能性が高いといえる。

もあるのだが、現時点では不明である。以上が、「供給が需要を生む」という言葉及び類似する表現についての歴史である。

ただし、次のような課題が新たに生じた。①ケインズからマッコルヴィンに伝わったという決定的証拠は、発見できていない。マッコルヴィンがケインズの『一般理論』を読んだ、と日記などに書き記していれば確かな証拠といえるのであるが筆者の力量を超えている。②マッコルヴィン以前に、セイの法則がイギリス図書館界では常識だった可能性もあるが、これも不明である。また、③マッコルヴィン自身が定式化した言葉を、‘*The Chance to Read*’以外の著書で書いているかもしれない⁶⁰。

さらに、④前川がマッコルヴィンの言葉を、森の『図書館の話』で知った可能性が高いが、定かではない。前川は1963年10月から半年ほど、イギリスで図書館事情調査を行なっている⁶¹。その際に聞いたのかもしれないのだが、筆者の文献調査ではわからなかった。⑤アーカートは「供給が需要を創る」という言葉を、何処で知ったのかも不明である。このように、新たな課題が噴出してくる。これらの課題を解決するためには、国を越え学問分野を越えた研究の必要性を痛感する。

しかしながら、本研究により以下のことだけは判明した。前川恒雄が図書館について用いた「供給が需要を生む」という言葉は、ケインズが世に広めたセイの法則を無視できないこと。そして、セイ自身が意図するところはセイの法則とは異なるのだが、セイの叙述のなかに原形が見られること。このように「供給が需要を生む」という言葉は、経済学でセイが原初的表現をし、筆者は確認できなかったがテイラー整理したという説があり、世界に広めたのはケインズで、図書館の事例に応用したのは多分マッコルヴィンである。マッコルヴィンの言葉を日本に伝えたのが森耕一であり、法則的に用いたのは前川恒雄とアーカートで、前川の言葉を文化に適用して捉えたのは上原恵美であると整理できる。最後になるが、もう1点判明したことがある。マッコルヴィンの言葉が、原著‘*The Chance to Read*’の何ページに記載されているかを、確認することができた。

⁶⁰ ただし、マッコルヴィンが1950年に刊行した『現代の図書館〔復刻版〕』（齋藤毅訳、日本図書館協会、1975。原著‘*Public Library Extension*’, UNESCO, 1950）では、「セイの法則」らしき文章は発見できなかった。

⁶¹ 「10.26 日図協、英国文化振興会の給費生として英国図書館事情調査のため鈴木四郎、前川恒雄を派遣」（奥泉和久『近代日本公共図書館年表 1867～2005』日本図書館協会、2009、p.180）とあり。「昭和39年の春、ロンドン発東京行き南回り日航機にのった私は、久しぶりに寿司や日本の雑誌のサービスをうけた」（前川恒雄『われらの図書館』筑摩書房、1987、p.3）と記載されている。

謝辞

本稿を書くにあたり、嶋田学さんと前川恒雄さんの『図書館界』での、誠意ある論稿があれば、何も始まらなかったと思います。ここにお礼を述べる次第です。